

政治老年学の発展のために－非政治化（高齢）

神 江 伸 介

目 次

はじめに

一 老化

1. 老化に突入
2. 正しい老化
3. いつから老人か
4. 老人と非高齢者の違いは僅か
5. 老人の定義

二 現状

1. 団塊の人々
2. 独居老人 投票率イメージ＝団塊＞独居老人
3. 家族・介護者とともに
投票率イメージ＝独居老人＞家族・介護者とともに
4. 死の前後
5. 小括

三 性の区別における違い

1. 性別投票参加
2. 性別投票理由－地元か国か
3. 性別政党支持の変化
4. イデオロギー
5. 生活満足、政治満足

おわりに

参考文献

はじめに

以下の展開は、第一に政治老年学を 60 歳以上の年齢層の人々の学として取り上げ、その層の政治行動を分析する。特に、アンケートに 1 人で答えるほどの一定の「元気」さを示したものを対象とする。

データは、本論の前半が文献データであるが、各項目のテーマとして精々 2 文字で表してその単語を含む文章が何回出てくるかカウントするものである。時代の雰囲気を知るために使った。

本論の後半にてでくるデータは、明るい選挙推進協会のもので 1980～2005 年までの衆院・参院選挙実施後の面接調査を、1980～1989 年、1990～1998 年、2000～2005 年の三つに分けた上で使う⁽¹⁾。

第二に、上の政治行動は、その行動を構成するより下の行動を強めたり、弱めたりする場合がある。より下のものといえば、SES と政党支持（あるか、ないか。保守系か、否か。）などが代表的であろうけれども、職業などは年金暮らしが多数派となり有意な差をもたらさないであろう。

それより、行動に違いを生むのは、男女の違いであろう。女性は 1945 年の終戦とともに成人有権者となり、それと共に無権者が有権者になった部分と最初から有権者の部分とに分かれ、且、自然寿命が男性より 7 歳ほど長生きであることが何をもちたさであろうか？ これは、「三 性の区別における違い」で言及する。

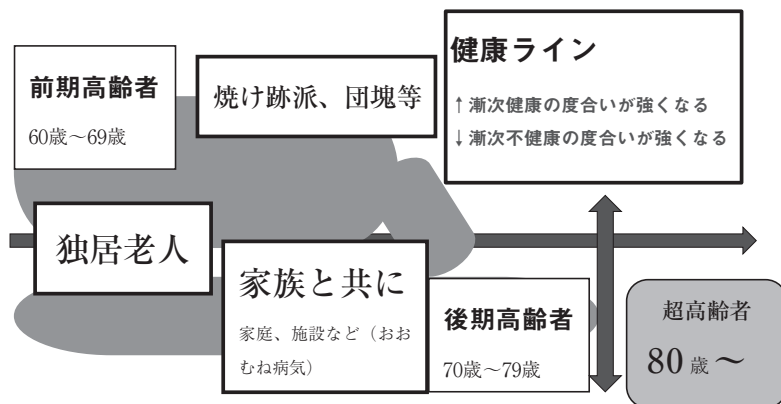
以下述べることに、第一に、家族形態が高齢者のみになっていく（家族員の中に非高齢者がいなくなること）、60 歳以降の性別年齢が次第に女性優位に変わっていく様子、第二に、世論データから高齢者女性の特徴を取り上げ、説明を試みしてみる。

一 老 化

まず「**図 1 高齢期以降の老人各層の動き**」という全体の図から見てみよう。学問各分野で高齢期を 60 歳と言ったり 65 歳と言ったりして一貫した定義が見当たらないが、

(1) この論文では自民党（高齢）（高齢者という意味、以下同じ）、社会・民主系（高齢）、支持なし（高齢）という超高齢期に「自民党」、「社会・民主系」（これは現在のところ発見はない。しかしデータにはないが 2009 年には出てきたかもしれない。）、「支持なし」割合が理由なく増えることに言及している。おなじく、生活満足化（高齢）、政治満足化（高齢）、自民化（高齢）、非政治化（高齢）、不活発化（高齢）も同様な現象を示すことがある。それなりの機能（例、満足は政治における不満を緩和させる）を持っているはずだが現在のところ不明瞭。年齢の作り方は、前期高齢期（60～69 歳）、後期高齢期（70～79 歳）、超高齢期（80 歳～）の 3 種。

図1 高齢期以降の老人各層の動き



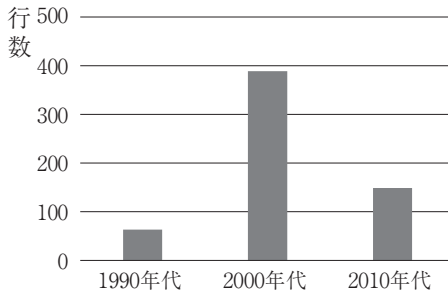
本論では前期高齢者を60歳からとしているので60歳以上として扱う。まず大きく年齢で60歳までを前期高齢者とし69歳までを区切り、それ以降79歳を後期高齢者とする。80歳以降を超高齢者層とする。なお、この区切りは、医療技術の発達、男女の差別、政府財政、等の変化と連動しており動きやすい。

それから、以前老人は家族に帰属すればよかったが、最近では核家族化が進展するに伴い、家族とともにいる老人、焼け跡派（野坂昭如命名）、団塊とそれ以降、そして独居老人、等に細分化されていく。さらに重要な点は、右上の「健康ライン」と書いてあることだが、そのラインはほぼ累積的で不可逆的な性格を持っているということである。これは、例えば、血圧が悪く70歳の人がいるとすれば、その人がそれだけであればそれだけ（高血圧症）で、その他に、心臓、肝臓、等他の疾患を持てば累積的に悪くなる、更にそれぞれに対応する薬を一生飲まねばならないという不可逆的な性格を持っているということである。

私が最も強調したい点は、対象者はもう高齢期にいたので多くの人が上から下へと種々の病気で落ちていくのは当然であるとしても、残った元気な高齢者をほっておいていいというわけではない。実は、この時期こそ、婚姻関係の揺らぎ、子供の独立と親の不安定化、離婚、親しい人の逝去、等々が堰を切ったかのように出て来るのである。ただここでそれらが政治とも関係があると断定するには問題がある場合と、問題がない場合がある。

ほかの図を見てみよう。⁽²⁾「図2 「65歳」の約10年間比較」では、全体が総文書数45,579件（その言葉を含む行数=以下同じ）、1990年代63（多く出ている書籍数=

図2 「65歳」の約10年間比較



以下同じ)『サクセスフル・エイジング』, 『老年心理学』), 2000年代 389件 (『高齢者福祉の世界』, 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』), 2010年代 149件 (『高齢社会考』, 『退職シニアと社会参加』)⁽³⁾) となっており期間の中ほどに評論家の関心が集中している。

1. 老化に突入

各人は、否が応でも、肉体的・精神的な面でも「老化」といわれる過程に入っていく。ここで、いくつかの例を見ていくが、その際その判断事例が、常識のレベルにとどまることはやむを得ない。ただ、一方においては、内外からの刺激を受けそれを、受け止める・出力等に変える高齢者がおり、他方においては、受動的に受ける人々がいるであろう。

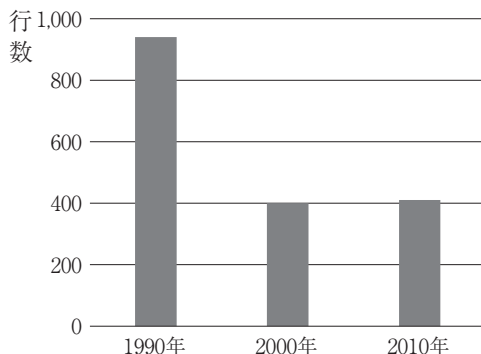
2. 正しい老化

まず統計データを見ておこう。「図3 「老化」の約10年間比較」では、全体が総文書数 52, 1, 733件, 1990年代 940件 (『75歳現役社会論』, 『サクセスフル・エイジング』), 2000年代 400件 (『心豊かに生き抜く知恵』, 『ほけとアルツハイマー』), 2010年代 410件 (『高齢社会考』, 『超高齢社会の基礎知識』) となっており評論家の関心が集中している。老化の一般的関心のあり方として、まず聞きなれない言葉(老化)が社会に

(2) ここからの市販本の索引リストとして参考文献に含めてある。そのリストも独断で決めたものであり、今回は試用である。コピーの補助的作業(本を電子データ化=pdfファイル化して全てのページを読み取り可能にする)を行うために付録としてついていた。その機能として、特定の本の特定の単語を指定すると、その単語を含む一定の長さの文章を切り取ってくれる。

(3) 福祉活動家、大学研究者、医者、等索引リストに掲載してある人たち。

図3 「老化」の約10年間比較



登場し社会の関心を奪い普段の倍ほど引き付け、それが社会にビルトインされて日本語の体系の中に入って落ち着く。

3. いつから老人か

老人精神科を専門とする和田秀樹は、75歳まで「平均的に自活可能」で、「本格的に要介護が一般的になり、またその比率のカーブが急になるのは八五歳を過ぎて」からだといっている。ニューガートンはこれらの、ヤング・オールドとオールド・オールド、オールドスト・オールドの三つに分けた。彼・彼女の「知的機能はほとんど落ちない」し、また「経験を有効に利用し、より妥当な判断を下せる能力」=老人の「知恵」と呼べる能力を持っている。いろいろ関心があるだろうが、この85歳が元気な高齢者の到達点といってもいいだろう。ただ老人の心の問題は多くの老人と同じく常に襲ってくる。それらは、「(これまでの)自分でなくなった」、定年退職で自分の社会的呼称、同じ呼すだちゆく子供らへの頭の切り替え失敗、自分をほめてくれる、自分のために利用できる対象を喪失、などなど、である。更に、脳の老化も進んでいく。しかしこれらのことは、一般に年齢相応である。人間関係を「相互依存の関係になれば、それで人間としては十分に成熟している」というような関係にして行けばよい。⁽⁴⁾

(4) 東京浴風会病院神経科医師。和田は『75歳現役社会論』(1997年、和田秀樹著)でまだ75歳でまだ働ける、をうちだす(ちょっと早い)。65歳を持ち出すのに大変な苦勞をしたのに、まして75歳を一体どうやって出すのか? 同書、17, 24, 31, 64, 69, 84頁。

4. 老人と非高齢者の違いは僅か

この中で、もう1歩歩を進めれば健常者のレベルに入ってしまう人たちが、ただ理論の対象たる老人は多いので、このレベルに入っている。例えば正高信男は、「アフォーダンスの知覚と自らの行為とにズレが生じた高齢者こそ、まさに世界と自己との間に薄膜⁽⁵⁾をはっている。このアフォーダンス(対自・対他との関係性)と「自らの行為」にズレが生じた人々こそ老人といているのではないか。

老後のことで不安に取りつかれている老人に対しては、坪野吉孝はほとんどすべてに対して、不安を取り除き、直面していることに対処しようとする。特に癌を取り上げてみると、「肥満を避け、運動をし、いろいろな食物を食べ、肉類とアルコールと塩分は控えめにし、特別なサプリメントは必要なし⁽⁶⁾」という具合に、まず、卑近な例で癌を流行らせる常識的なケースを破っておき、自分の主張に引き入れてゆくという方法を取るというのが一般的である。

『老害』でとりあげられている夫が(老害)となるケースだが、現役中は東大の연구원で、退職後うつ病を発症、土いじりなどしているうちに治り、しかし高齢になっていくうち足腰が弱りながらも「静かに逝ってくれ⁽⁷⁾」そうにもない。いろいろ考えさせられるが、期間の長・短、程度の差はあれどこにでもある老化の話だ。

次は「俺」(＝南仲坊)⁽⁸⁾がいつの間にか「おじいさん」に変わっており、それに「俺」はいつの間にか気づかない話、「わけもなしに」肩こりが来たり、「何度も忘れる」名前をまた忘れてたり、などこれも自然に老化していく過程で行き当たるものである。これもよくある。

5. 老人の定義

天野正子は、「ひとりの人間が生る全体を作り上げてゆく過程そのものが「古い」であ」りそして中年、青年、そして壮年を作り上げていったが、まだ「古い」を作っていない、と述べ、老いを語る第1部、第2部を展開し、第3部で「人と老いとの出会い、相互交流」が描かれる。そこでは、種々の事例を挙げながら、老年が作られようとする過程が描かれる。⁽⁹⁾「せい」は、三野混沌を生涯の伴侶として選んで、5名の子供をうみ・育て、そのため本格的な文芸活動はできなかった。彼女が文壇にデビューしたのは、夫

(5) 正高信男著『老いはこうしてつくられる』(2000年)、39、113頁。

(6) 文藝春秋編『老後の真実』(2013年、坪野吉孝)、91頁。

(7) 佐藤ゆかり他著『老害』(2011年)、96頁。

(8) 南仲坊著『オレって老人』(2013年)、11、16、27頁。

(9) 天野正子著『老いへのまなざし』(2006年)、11頁。同書、11～12頁。

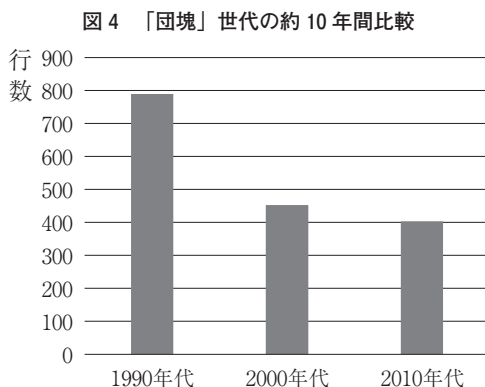
（文壇人－神江）が亡くなって僅か3年の間であり，その中で夫と自分には「挑みたたかう」対象としての自然観，自分の中に「運命としての老い」を体現しており，夫とはとても一緒にはやれない筈である（夫は「土のこころ」，「永遠の少年性」持つ）。しかし，せいは「魂の「孤独」」を認めつつも，「友愛」という感覚が，疎外されたもの同士を吸引し横の絆を深めている⁽¹⁰⁾。

さて，老後は幾つから，どんな人に決めたらよいのか。和田の場合，アメリカで「活動的な平均余命」と「依存的な平均余命」という分け方⁽¹¹⁾に従っており，「75歳をカット・ポイント」と呼んでいる。これこそ，筆者が「三性の区別における違い」で取っている分析上データ上の都合から60歳からか，他の方法があるのか？ 私としては，60歳以上で，年齢は自分で決めさせる，ということになりそうだが，こうなると科学的分析になってゆかない。どうしようか。

二 現 状

1. 団塊の人々

データを見てみよう。「図4 「団塊」世代の約10年間比較」では，全体が総文書数47, 1,340件で，1990年代790件（『おじさんの逆襲』，『団塊ジュニア市場』の本で殆どを占める），2000年代453件（『団塊ひとりぼっち』，『超高齢社会は高齢者が支える』），2010年代403件（『「サードエイジ」をどう生きるか』，『団塊絶壁』）となってお



(10) 同書，「2 文体と老い——吉野せいの世界」，203～219頁。

(11) 和田前掲書，17頁。

り右肩下がりに評論家の関心が減っている。というのは、団塊の世代が占めるのは3年
齢でしかなく65歳以上の年齢が彼・彼女らの何をどのように代表させるのかが分ら
ない。

団塊というのは、1947～49年にかけて生まれた大量の人の塊をさし、その人々が退
職グループに入ってくる現象であるが、その人々が元気である、ということで何らかの
仕事をやってもらいたい、とするグループ内外の考えがある。

しかし、人口構成上の日本の政治を論ずる場合、必ず出てくるのが団塊などの世代論
である。ここでは、20歳代で他に類するものがない何者かを持っているという点で世
代の名称を与えていだろう。しかし、ただ小学校のクラス数が多かった、受験生の
数、大学紛争の規模、等々彼・彼女らが「団塊」だという意味で起こしたことではなく、
もっと別のものにも原因を求めた方がいいものもある。だから、我々も団塊が積極的に
社会変革に動いたというより、本格的な変革はどこか別のところで芽吹きあとで参加し
たというものであろう。むしろその世代を取り上げるとするなら初めて墨塗の教科書を
与えられた以降の世代になろう。社会生活の面では、博報堂のNEW(昭和22～25年)
とOLD(昭和15年～18年)を比較した調査が面白いだろう。⁽¹²⁾

ここでは寺島実郎に語って貰おう。彼が強調する「[都市新中間層]の高齢化こそ、
日本の高齢化社会の核心的問題」と指摘し、「サラリーマンとして企業・団体・官庁な
どで働き、つまり機能集団としてのゲゼルシャフトに帰属していた人生を送ってきた人
たちは、ひとたびそこから去ったら、多くの場合、もはややること⁽¹³⁾がない」のである。
そのために、より多くの国民を「食と農」に参画させて「高齢者」に安定した社会シ
ステムを提供させる、ことに繋がる。

新しい老人(=ニュー高齢者と染谷侏子は言う)の家族関係観に関しては、染谷にい
くつか語らせてみよう。親との同居については、「自分たちは息子夫婦との同居を望ま
なくなり」、「娘のほうが、なにかと気兼ねなく支援を頼めるため、「娘がいて安心」と
思うよう」になった。「親との同居」または「親の介護」とは、「自分の親との同居」と
「自分の親の介護」を意味する。子供による親の介護は、施設による介護、高額の入居
料を払う有料高齢者施設、などと並んで一つの選択肢にまで落ちている。ニュー高齢者
は、平均的には多くが夫婦で生活を楽しみ、介護が必要になったら、すでに施行されて
いる介護保険サービス⁽¹⁴⁾を利用し、自分たち自身で対処しようとするのが一
般的である。

(12) 博報堂生活総合研究所編『おじさんの逆襲』(1990年)、187頁。

(13) 寺島実郎著『シルバー・デモクラシー』(2017年)、163頁。同書、165頁。

(14) 染谷侏子著『まだ老人と呼ばないで』(2010年)、71頁。同書、75～76、106頁。

更に、片桐恵子も同じく団塊の世代を（主たる）⁽¹⁵⁾対象として「何をなすべき」か、に注目している。今の高齢者の参加活動を「社会参加活動」だけでは不足で、「生産的活動」と「市民参加活動」を視野に入れるべき」として、ボランティア参加、生涯学習への参加、労働力としての参加、政治参加、等が調べられた。

2. 独居老人 投票率イメージ＝団塊＞独居老人

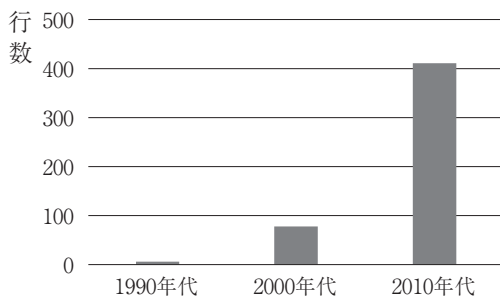
データは、「図5「独居」老人の約10年間比較」である。全体が総文書数33,494件、1990年代6件（『老後保障を学ぶ人のために』）、2000年代78件（『定年後－豊かに生きるための知恵』、『高齢社会のケアサイエンス』）、2010年代411件（『気がつけばドッキョロージン』、『男の孤独死』）となっており右肩上がりに評論家の関心が増している。すでに社会問題化もし、まさにこれからもっと一般化していく傾向にある。

今は自分のせいであるにせよ、あるいは自然の流れ（死亡、望まない離婚、…）でそうなったにせよ、連れ合いもいない状態にある人々の中で暮らしている。

彼・彼女らは、一人で暮らし、その状況につき自分の考えを持っている人たちのことである。

ここでまず取り上げるのは、老化過程にあるが周囲も本人も全くそれを気にすることなく、その過程をやり過ごしていくタイプのことである。世間では、汚い、いやだ、怠惰、非生産的、ごみ、…の悪印象も伴うこともある。何の意味もないが、本人たちにとっては重要な意味を持っており、生きがいにまで昇華している。こういう意味で、政治老年学の発展にはすぐには役立たないとはいえ、本人たちは社会の中で華を開くその1歩を歩み始めている。

図5 「独居」老人の約10年間比較



(15) 片桐恵子著『サードエイジをどう生きるか』（2017年）、v、27頁。主として第2章より。

こういう事例を集めこういう生き方の良さを世に問う人に都築響一がいる。都築は、『独居老人スタイル』という本の中で例えばごみに囲まれて暮らしている秋山裕徳太子の例を挙げている。「ものを作る¹⁶⁾つていう」ことは「生産的」だが、「ものを片付けるのは苦痛」だ、⁽¹⁶⁾ といっているし、そういうことをしない生活は「自由」であると言っている。

ある眼科医（西田輝夫）は、70歳で妻を亡くし、一度に家事全般をやってしまわねばならない状況に置かれ、その奮闘記をまとめている。西田は、炊事、洗濯、掃除、家に関すること、4つのことを挙げ、それぞれに関する細かい手順・動作を挙げて（例えば、野菜、肉等を選定すること、調理、食器洗い）いる。これらのことは、若いものなら何でもなかりうが、70歳でしかも夫婦者で、最後の食事まで妻に頼るところが、自分でせねばならなくなつたところに悲喜劇⁽¹⁷⁾がある。

小園さんは現在76歳、東京のタワーが見られるアパートで一人暮らしだが、一つだけ他の老人と異なる点は、調度品が片付いていたことである。刑務所暮らしが数回か、よき片付けを連想させる。それはともかく、76歳の彼は「年取ってからのムシヨ暮らしは疲れるよ。もういいよ、ムシヨは飽きた。ウンザリだ」といえるほど老いてからは、⁽¹⁸⁾ 長く「老いはれは（ムシヨに一筆者）入ると皆寿命が延びるんだ」と悔やませている。

「一人暮らし」の高齢者ということになれば、河合克義に因ると女性が8.5割を占め、持ち家が半数、一人暮らしの期間が10年以上の人で6.5割、一人暮らしになった理由が「配偶者の死亡」が4割、健康な人は3割、等生活に余裕のない人が多い。⁽¹⁹⁾

そこで人は死ぬわけであるが、独居老人の場合、「孤独死」を伴うことは当然であるにしても、男女の比を見たら内7割が男性であったとある。⁽²⁰⁾ ということ、長尾和宏は男性に特に警告を与える。長尾は、下手すれば解剖までいってしまうので死亡診断書を書けるように、なるだけ日頃医者に掛かておく、早いタイミングで見つけてもらえるように鍵を看護師さんなどに預けておく、等の措置を提案する。⁽²¹⁾

最後にまとめとして、加藤仁を挙げておこう。なぜかという、日本の典型的な集団主義の組織原理から離れ、「自己本位」⁽²²⁾ を求めようとする退職者に焦点を当て、25年の取材活動が数年前に3千人を超えたところで、研究の、手際よい纏め、広さ、深さ、に

(16) 都築響一著『独居老人スタイル』（2013年）、57頁。

(17) 西田輝夫著『70歳、はじめての男独り暮らし』（2017年）、23頁。

(18) 新郷由起著『絶望老人』（2017年）、307頁。

(19) 河合克義著『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』（2009年）、140～143頁。

(20) 性に特に焦点を当てた視覚から高齢層を見る場合に見る。長尾和宏著『男の孤独死』（2017年）、5頁。

(21) 前掲書、「第1章 これが「孤独死」の現実」。

(22) 加藤仁著『定年後－豊かに生きるための知恵』（2007年）、182～220頁。

該当するものは、これ以外に見当たらない。「第6章 終の住処」と名付けてありいかにもシニア向けである。いくつか紹介すると、「終の住処」が甘くてちっとも「終」にならない事態、仕事、趣味、宗教、家族、交友、過去の栄光も視野において介護を実行することをラディカル介護と呼ぶとともにその実行事例、もう既に寡婦の時代が到来し夫と比べて10年近く長く生きることになる複数の女性の楽しき人生、施設内で嫌われ者になっていた老女があることで緊急事態の（善意の）ナースコールを押しそれ以来「やさしいひと」になった話、広島県のある施設ではそれぞれが得意とすることをやってもらったら活力を取り戻した、等々面白話が展開されている。

連れ合いも居ず独身状態にある人々の中で、彼・彼女らは、一人で暮らすことにも何らかの考えを持っていることだろう。

3. 家族・介護者とともに 投票率イメージ＝独居老人>家族・介護者とともに

まず、個別の病気には問題とせず、家庭での介護の仕方、地域での協力があがり、このことについて手島陸久に語って貰おう。そのため、方策として「(1)信頼できる主治医を確保…自己管理、(2)…まだできることにも目を向けて、…(3)…活動や役割を保つ…家族以外にも慰めあい、励ましあえる仲間…(4)保健・医療・福祉の…サービスを早期から積極的に活用…」⁽²³⁾することを促す。更に、医療費や介護の問題、等が派生してくる。一つ一つの病気が重く、間違ったら寝たきりになってしまうような危険性を持っているので、「社会的に整備されているいろいろなサービスを使いこなして」⁽²⁴⁾いくことである、と助言する。

では、老人のかかる疾患として特有ものは何であろうか、死因とどれぐらい関係するのか？ これを議論する専門家ではないが、前期高齢者では、男女ともがんが一位で、80歳を過ぎるとがんは最低のレベルに落ちる。そうして、心疾患、脳血管疾患、肺炎・気管支炎が上位を占める。⁽²⁵⁾しかし、これらの病気は、いずれも老人に特有な病気ではない。もっとも代表的な病気は老人特有のボケであろう。ただ、ここでは自然のボケ（広義）でと、病気での「ボケ」（狭義）、アルツハイマー、脳血管障害による「ボケ」、それにプラスして、ピック病、前頭側頭型痴呆、軽度認知障害（MCI）、がある。

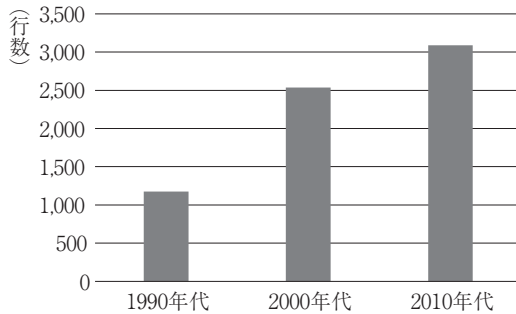
広義のボケは、病であるかどうかにかかわらず、例えば、物忘れを自覚しているかどうか、忘れていても何かの調子で思い出す、日付を忘れるけれど2～3日の違い位、度忘れはちょいちょい、特別な原因はないのに意欲減退しない、身だしなみには気を遣

(23) 助東京都老人総合研究所編『老後生活への軟着陸』（1993年）、第3章、63頁（手島陸久）。

(24) 前掲書、84頁。

(25) 助東京都老人総合研究所編『サクセスフル・エイジング』（1998年）、236～237頁。

図6 「介護」の約10年間比較



う、⁽²⁶⁾ 医者はよく受診する。これが病気になると、物忘れという自覚がない、何かの調子でも思い出さない、日付は月も忘れる、度忘れは本当に忘れている、原因はないのに意欲減退をする、身だしなみに無関心、医者を嫌がって受診しない。

ここで、データを見てみよう。「図6 「介護」の約10年間比較」を見ると、全体が総文書数 88, 10, 718 件、1990年代 1, 176 件（『75歳現役社会論』、『エイジングとは何か』）、2000年代 2, 538 件（『定年後-豊かに生きるための知恵』、『高齢社会のケアサイエンス』）、2010年代 3, 091 件（『高齢社会考』、『古い衰えゆくことの発見』）となり右肩上がりに評論家の関心が増している。

4. 死の前後

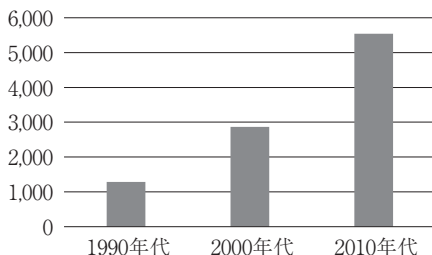
もう一つデータを（「図7 「死」の約10年間比較」）を見てみよう。全体が総文書数 92, 8, 706 件、1990年代 1, 288 件（『老後生活への軟着陸』、『アダルト・チルドレン』）、2000年代 2, 865 件（『心豊かに生き抜く知恵』、『古い方練習帳』）、2010年代 5, 543 件（『思い通りの死に方』、『老人漂流社会』）となり右肩上がりに評論家の関心が増大している。ここでは死という自然的なものに対する人間の反応であったが、それでさえ感情によって揺れ動くものである。それでも、死というものが軽くなる方向で動いていなくて良かった。

今「老人漂流社会」⁽²⁷⁾ という言葉が流行っている。NHKの命名によるものだが、死の直前になっても安住できる「終の住処」を持たずに、病院や施設を転々とし、同居人が

(26) 大友英一著『はけとアルツハイマー』（2006年）、186～188頁。

(27) NHK スペシャル取材班『老人漂流社会』（2013年）、11、14～15、17頁。

図7 「死」の約10年間比較



いてもその人を自動的に一人にしてしまう社会である。そして社会の方は「お年寄りを“ノロマの役立たず”」, 「高齢者＝何も生み出さない人＝役に立たない人」と決めつけ、①在宅医療・介護サービス, ②施設に入所する, と金のかかる選択肢以外は提供していない。今は, 高齢化・単身化・貧困化に対応して扱えるものとして, 無料低額宿泊所(＝無低)と簡易宿泊所があるがこれらを一時的なものとしてではなく終の住処として利用するものがある。

無低は, 部屋が狭く, テレビとエアコン, それにベッドであるが, 「死ぬまでここにいさせてほしい」とする切実な入居者の願いを反映している。食事の世話が本当はいるがそれをしないで自分でやっている人, 無低の枠の中で少しでもいい条件の部屋を探す人, などである。ここで(吉田さん), 幸せな老後を描いていた人が本人・介護者の病気などによって一人になり, 介護施設(＝結局無料低額宿泊所)に行かざるを得なくなった。吉田さんの娘が必死になって見つけてくれたのがNPOの無低であった。吉田さんが入・退院を繰り返していたら病院, 無低と漂流社会を繰り返していたところだが, 幸いにしてそれはなく, かわりに, 「寂しさややるせない境遇に耐えてきた吉田さん」⁽²⁸⁾をやっと安住の地へ送れたというささやかな満足感が周囲にあるのではないか。

ところで, 葬儀や墓を中心として, 銀行, 介護サービス事業者, 遺品整理業者, 法律専門家, 資格ビジネス等, 様々な業種の事業者が登場し, 一つの産業にまで育ってきている。それとともに, これまで家族などがやってきた各種の仕事が関連の業種に取られていった。⁽²⁹⁾死に行くものは, 例えばエンディングノート(最終段階で本人の意思等)を書いたり, (あらかじめ最後の治療や療養の方針を決めておく)アドバンス・ケア・プランニング等を作ったりは, 不可欠であろう。しかし, そういう手段をとっても葬儀と

(28) 前掲書, 93, 96, 97, 98, 105, 107, 122頁。

(29) 小谷みどり著『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』, 序章。

いうものが尚彼・彼女の意思から離れてゆくという大きな流れは変わらない。⁽³⁰⁾

病の床にあり十分役割を果たされ続けられる人、周囲の意思で生かされ続ける人等、⁽³¹⁾の 80 歳代以上の超高齢者の話に移ろう。次のような理由で超高齢者の死を願う人が増えていると杉浦は言う。ご主人を亡くし「早く迎えが来てほしい」という人、病気で体調が優れなかったりすると「人に会うのが億劫」という理由で引きこもり家族や社会からの「孤立」「孤独」になる人、「死にたい」が口癖の認知症の人、「迷惑をかけたくない」・「お荷物」という思いが社会に負担をかけ死にたいという意識に繋がること、「高齢者の自殺の約 7 割にうつ病やうつ状態が関わっている」という指摘、胃瘻を作り、また「徹底して治療する」という事例、⁽³²⁾これらは多くの「死ねない老人」を生んでいる。また、⁽³³⁾家族で看取られる家での死ではなく、病院死が医療当事者・家族等に大変な人気である。この傾向をひっくり返すのは、核家族を大家族に戻すのが難しいのと同じく難しい。

しかしながら、彼・彼女らもいずれ目の前には〈死〉がまっっており、その帳が形式的には早いか遅いかの違いになってくるので、死の前にある程度時間があり何かやっからという人々には物足りないだろう。

5. 小 括

老人の世界は今どうなっているかということで、一応スケッチしてみたが、なんといっても生命力を溢れさせている非高齢者の時代とは真逆の、生命力を維持し節約しながら高齢者が奮闘しているという時期にあるのは間違いない。そして、パートナーがいなくても、好きなことをしながら高齢者の時代を生き抜くという態度（特に 80 歳を超えたら女性）で居るのも最低限必要である。ところで、高齢者でも勿論投票等に行くが筆者が見つけた範囲で以下の男性、女性の行動上の違いがあり説明を要求している。早速見てみよう。

三 性の区別における違い

1. 性別投票参加

まず、男女別年齢別の投票率の違いを見るために、「**図 8, 9, 10, 男女別年齢別投**

(30) 「生前葬」は非常に魅力的な試みであるが日本ではまだ一般的でなからう。前掲書、74 頁。

(31) 杉浦敏之著『死ねない老人』(2017 年)。

(32) 前掲書、20, 24, 26, 28, 35, 44 頁。

(33) 1951 年は自宅死が 82%、2013 年には病院死が 76% である。杉浦、前掲書、68-69 頁。

図8 男女別年齢別投票率
－第Ⅰ期

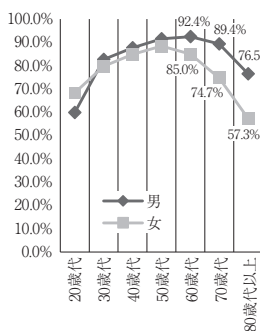


図9 男女別年齢別投票率
－第Ⅱ期

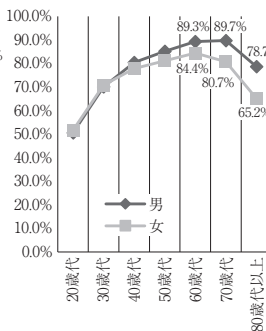
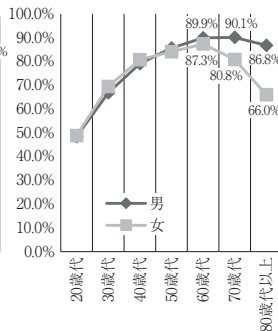


図10 男女別年齢別投票率
－第Ⅲ期



票率」の図を見ておいていただきたい。

図8（第Ⅰ期）では、男性のほうが低投票率から出発し30歳前に男性が女性を抜いて逆転し、5%程度の差で55歳までこの傾向が続き、それから男性のほうは60歳からゆっくりと、女性のほうは50歳から急速に不活発になる。次に、不活発化が第Ⅱ期70歳代まで移動し、第Ⅲ期では第Ⅱ期に若干開いていた部分がほぼ閉じるという、10年ごとのデータでは非常に美しい様相を呈する。

しかし、60歳代から70歳に至ると、(1)男女いずれにも働く老化の力、(2)男女差別的に働く老化力のバラエティー（女性にはかなり差別的）、(3)3:7からの比で男女人数比があるならば、一定年齢以降の全体の投票率も女性の投票率を反映させた「全体」としている可能性が大である。

2. 性別投票理由－地元か国か

これは、政治家が、誰を、どの範囲の利益を代表することを望むかという、衆議院選挙の際に聞かれる質問のひとつである。これを、性別にみたらどのような違いが出てくるのだろうか？ 質問は第Ⅱ期までが同じである。第Ⅲ期は多数回答になっていたりするので省略した。

第Ⅰ、Ⅱ期における質問回答の集計結果が、図11、12である。元来は6つ中1つの択一回答であるが、「地元」志向と「国」志向を対比させるため、質問への回答の中から、「地元」と「国」の二つを取り上げた。

「地元」か「国」かに関する具体的な政治意識は、非高齢者時代に大人としての利害関係が成長する過程で「国」指向が強くなり、高齢期の到来とともに弱まり「地元」指向が

図11 時期別男女別代表観の相違
— 第Ⅰ期

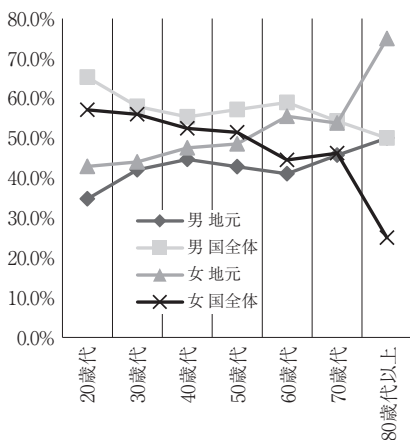
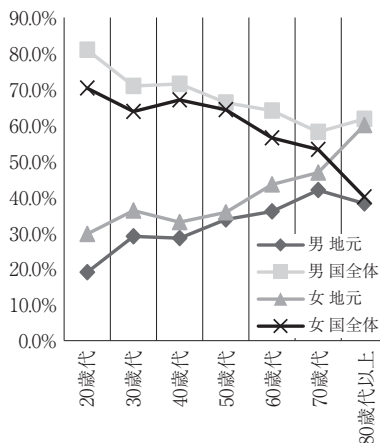


図12 時期別男女別代表観の相違
— 第Ⅱ期



強まるというサイクルがあり、図11、12はこの過程を反映している。かつ、その傾向は第Ⅰ期より第Ⅱ期が強く、女より男の方が強い。この最後の点で注目するのは、第Ⅰ期の女の地元と国が交わる点が55歳近くにあつて、第Ⅱ期でこの点より20年後ろの75歳近くになる。この点は、20年余りある期間で行われる政治の学習が女の間で10年早く効率的に行われたことを示している。

3. 性別政党支持の変化

図13、図14。第Ⅰ期では、自民支持層(男)による出発点の%値は27%で、高齢化に伴って60歳の高齢期には60%(第Ⅰ期)、70歳の後期高齢期には64%(第Ⅰ期)になり最後の超高齢期でも自民への伸びはやまず8%も記録している。この傾向は第Ⅱ期でもやまず、全体として10%程度支持を落としながらも第Ⅰ期に倣っている。

問題は、自民の女性支持層だが、こちらは第Ⅰ期が51%でそれから後期高齢期といつても僅かに増えるだけであり、超高齢期に至っては特有の非政治化(高齢)が強く働きどうにもならない。私の以前の著作では、男女別の分析をやっていないので仕方が無つたが³⁴…。

図15、図16。社会・民主系に移ろう。第Ⅰ期男子では、非自民の出発点の%値は28%

³⁴ 拙著『政治老年学序説-胎動するニューシニア』(2005年)の内「3.政党支持」を参照の事。

図13 政党支持の内自民党－男

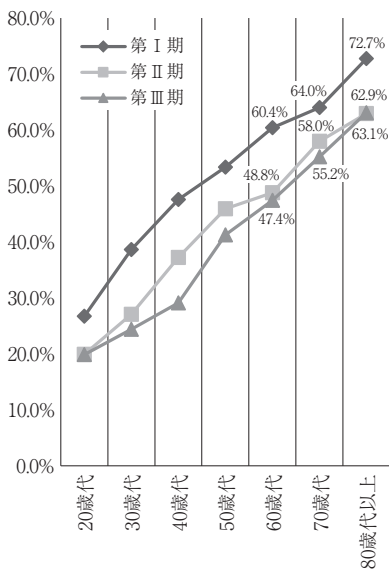


図14 政党支持の内自民党－女

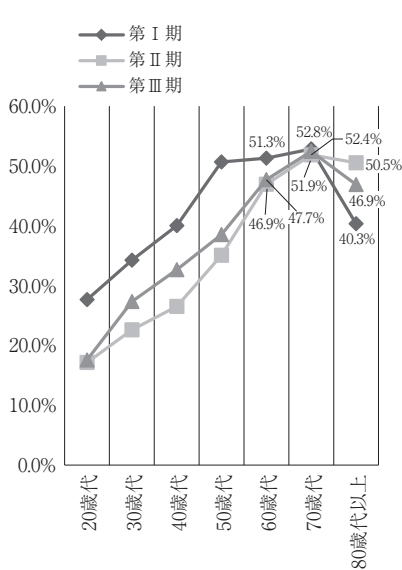


図15 政党支持の内社会・民主－男

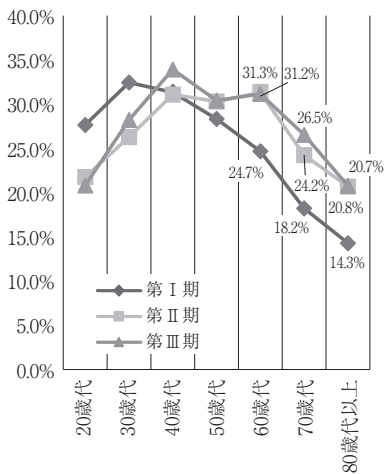


図16 政党支持の内社会・民主－女

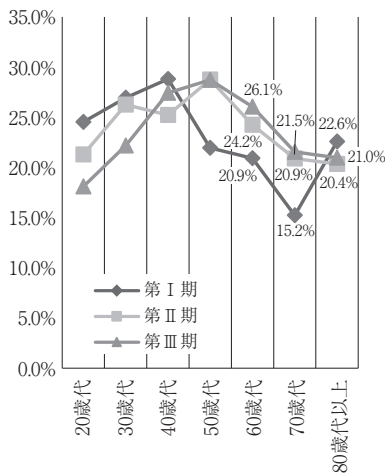


図17 政党支持の内支持なし—男

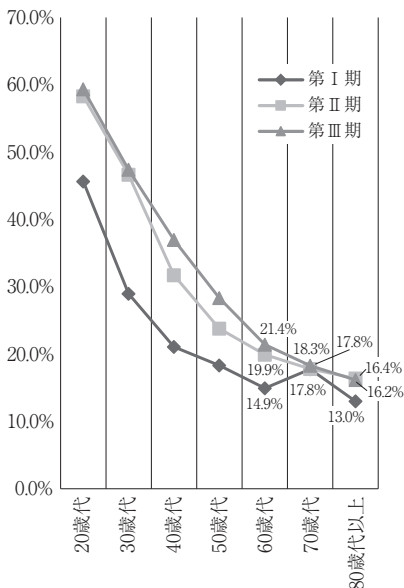
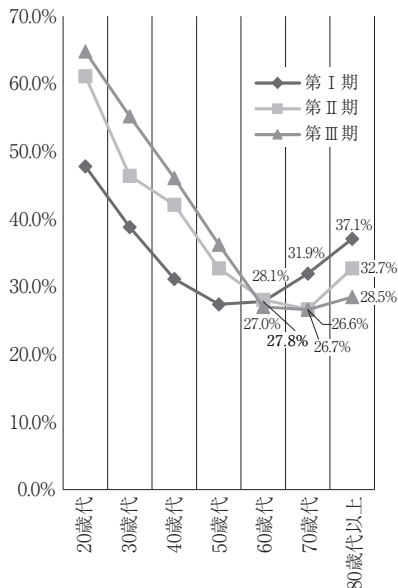


図18 政党支持の内支持なし—女



で自民支持層とあまり変わらず、60歳の引退進入時には25%、70歳の後期高齢期が18%、超高齢期が14%で前の自民層の逆をいっている。勢力で言って、与野党伯仲状態から、60歳の25%から、70歳18%、80歳の14%の差をつけられた非自民層は少数派とおとしめられる。他時期の男もあまり変わりがなかった。

図17、図18。女子支持なしの場合更に超高齢期における意識の動きがはっきりしてくる。女の後期・超高齢期には、非政治化⁽³⁵⁾(高齢)の超高齢型政治意識が働いているといえる(自民化(高齢)も働いているのだがそれは僅かだろう)。

男子支持なし層は、第I期データでは、出発点の%値は46%で、60歳の引退進入時には15%、70歳で18%、80歳が13%に激減した。そして、男子支持なし層はほぼ全てが減り続け、男子社会・民主系も引退時期=60歳以降減りが始まったということは、そのほとんどが男子自民系増加に寄与したとみてよい。

³⁵⁾ 高齢期の「支持なし」を特に表現した場合はこのようになる。

図19 保革意識－男

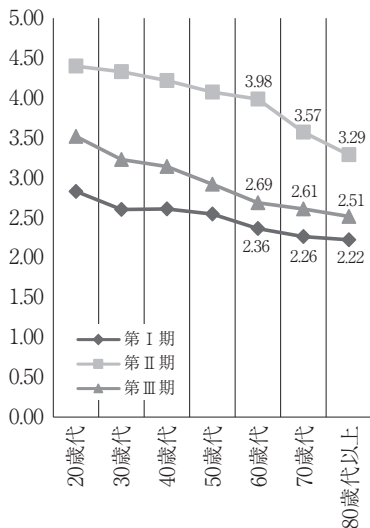
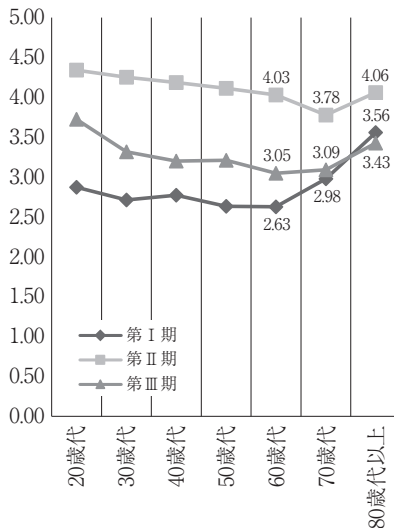


図20 保革意識－女



4. イデオロギー

イデオロギーについては、よく保守的とか、革新的とか言われるが、貴方はどれに入るか、の質問に対応したものである。

「1. 保守的, 2. やや保守的, 3. 中間, 4. やや革新的, 5. 革新的, 6. わからない(欠損値で分析から外す)」(イデオロギーのみで、平均値)。

第Ⅰ期から第Ⅱ、Ⅲ期のデータの男では、第Ⅰ期が保守的で最も低く(大平の時と中曽根の時の時代)、第Ⅱ期は自民党・社が大分裂をして革新性は大きいに人気が出て来たが、第Ⅲ期は通常にもどったところか。

一応分析を加えておくと、(右肩下がり(値が小さく=保守化, 自民化, 満足化, …)で日本の有権者の基本傾向である)をつかんでおいて、敏感に選挙のムードを読んで、行動するというモデルとなる人々は「保革意識－男」におけるわけで、他方、「保革意識－女」の方は60歳代までは男とかわらないにしても、高齢期にはいつてからが問題である。

女では、60歳の入る位置は様々であるが、データを見ると、2.63(第Ⅰ期)→3.05(第Ⅲ期)→4.03(第Ⅱ期)と様々であるにしても、データを定める三つの数字で各々の第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期を見ると、2.63→2.98→3.56(第Ⅰ期)、4.03→3.78→4.06(第Ⅱ期)、3.05→3.09→3.43(第Ⅲ期)となり、第Ⅰ期と比べてⅢ期は70歳代まで男とよく似て来る一方、最後の80歳代は超高齢期の影響がまだ強く残っている。

図21 生活満足度－男

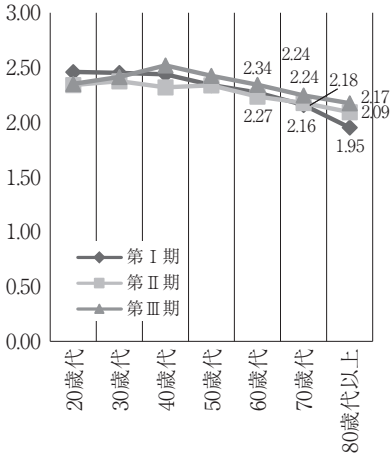


図22 生活満足度－女

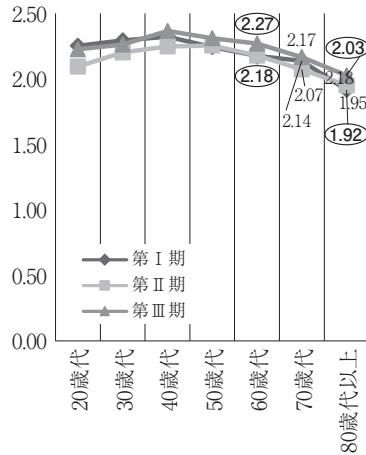


図23 政治満足度－男

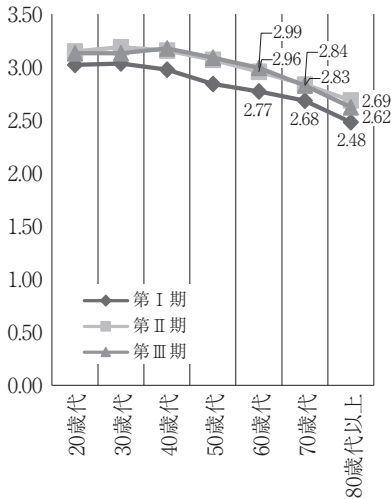
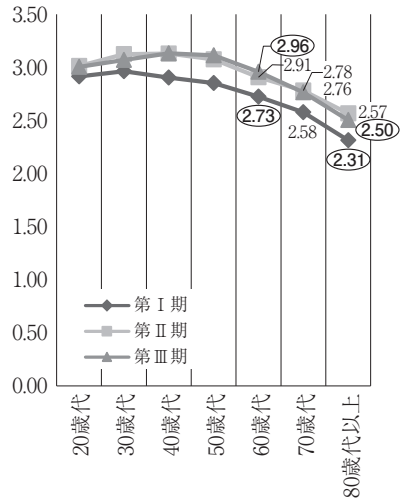


図24 政治満足度－女



5. 生活満足, 政治満足

生活満足・政治満足と年齢との関係を示す図のうち第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ期データが示している図を見てみよう (図21, 図22, 図23, 図24, 値は平均値)。男性の生活満足・政治

満足ともに60歳以上は0.29（前期－超），0.29の変化（第Ⅰ）である。また，第Ⅱ期，第Ⅲ期はさらに上方向に伸びていっている。男性の生活満足・政治満足の高齢期第Ⅲ期の最低値，最高値は，おのおの2.34，2.17，2.99，2.62である。

女性の生活満足・政治満足（**図 22, 24**）ともに60歳以上の変化（第Ⅰ）でやはり右肩下がりがみられる。女性の生活満足・政治満足の高齢期の最高・最低は，おのおの2.18，1.92，2.73，2.31（第Ⅰ期）である。それは，第Ⅲ期は2.27，2.03，2.96，2.50でありまだどうにもならない。

即ち，男性の場合（**図 21, 23**）生活満足・政治満足の方は次第にフラットになりつつあり（超高齢型政治意識を受け付け難くなる），女性の場合には生活満足にみるようにまだ超高齢型政治意識の助けが要るようだ。ただ一言付け加えておけば，政治満足度⇒生活満足度の順に深まる政治意識が，社会意識⇒生活意識⇒個人意識となって括り始めそれと共に非政治変数の影響を受け始める（現在この点はまだ説明出来ていない）。

おわりに

以上のとおり，まずこれから扱う対象は，老人であり，いつから老人か，なにをするひとたちか，等という疑問を呈すること自体社会科学では新しい分野であるし，まして政治学では未知の分野であることを示している。私はこれを研究テーマにしようということを，まったく関係のない作業の中で発見した。2003年，『現代のエスプリ』の依頼を受け全国サンプルのデータをいじっている内，ある年度のデータは次の十分離れたところのデータとは随分とその後ろが長いな，ということに気付いた。即ち，後のデータほど〈長生き〉なのだ。それに基づいて21世紀1個，20世紀2個のデータになっている（全調査数=35,278人）。

確かに，「団塊」は多い。しかし「焼け跡派」をプラスするとさらに多くなり，独居老人を入れたらさらに多くなる。十分なサンプルの下での年齢の限られた分析が要求される。

そこで，結局，自民党支持がそのまま継続し増える（男）が第一（これも超高齢政治意識といってよい）と，野党には全然いかないが第二（男，女）と，第三に，超高齢政治意識の中の非政治化（高齢）が働いており，ここで注意するのは第三のものである。なお，ここでは政治老年学でもやるし全年齢での話題にもなりそうな第一のものには触れなかったが，単に学問の形式的な分担の問題に留まらずにもっと大きな社会化の問題になるので，ここでは指摘のみにとどめておく。

投票参加の三つ目の図（**図 10**），「**図 14 政党支持の内自民党－女**」の図，「**図 18**

政党支持の内支持なし-女」の図、「図 20 保革意識-女」の図、では、ここで問題にする傾向を見せている。ただ同時に、第 I 期、第 II 期、第三期と経過中に次第に男性と似てくる。これは時間が解決するように待つのか、何か別の病気が反映しているのか、それとも何か別の方法による参加があるのか？

それから、図 11 ⇒ 図 12 の例にあるように、女子の側からの努力の結果として 10 年差が 20 年の差を生むというのか、いやあの場合はイデオロギーが関わっていたので、投票参加とか政党という「やること」や「もの」とは違うという意見もあろう。大いに議論を関わらせてほしいものである。

参 考 文 献

- 「サードエイジ」をどう生きるか-シニアと拓く高齢先端社会 片桐恵子著 2017 年
「介護&老後&備えるおカネ」大全 2014 日経トップリーダー他著 2014 年
「女性活躍」に翻弄される人びと 奥田翔子著 2018 年
「団地族」のいま-高齢化、孤立、自治会 小池高史著 2017 年
「若い」の技法-アクティブ・シニアを支える便利な暮らしの道具 浜田きよ子著 2015 年
「老い」を自覚したら読む本-心豊かに生き抜く知恵 折茂肇著 2000 年
〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓 小谷みどり著 2017 年
2050 老人大国の現実 小笠原泰/渡辺智之著 2012 年
21 世紀高齢社会とボランティア活動 池田勝徳著 2004 年
70 歳、はじめての男独り暮らし 西田輝夫著 2017 年
75 歳現役社会論-老年医学をもとに 和田秀樹著 1997 年
dofor から dowith へ-高齢者の発達と支援 城仁士編著 2009 年
アダルト・チルドレン 西山明著 1995 年
あれも家族これも家族 福島瑞穂著 2001 年
いくつになっても美しくいられる秘訣 大内順子著 2010 年
エイジングとは何か-高齢社会の生き方 浜口晴彦編 1997 年
エイジングと公共性 渋谷望/空閑厚樹編著 2002 年
エイジングの社会心理学-ニューセンチュリー社会心理学 辻正二/船津衛編著 2003 年
エイジングの政治学 内田満/岩淵勝好著 1999 年
おじさんの逆襲-団塊の世代いま甦る 博報堂生活総合研究所編 1990 年
オレって老人？ 南伸坊著 2013 年
ケアからエンパワーメントへ-人を支援することは意思決定を支援すること 北野誠一著 2015 年
サクセスフル・エイジング-老化を理解するために 東京都老人総合研究所 1998 年
ジェンダーと福祉国家-欧米におけるケア・労働・福祉 杉本貴代栄 (監訳) 2009 年
シルバー・シネマ・パラダイス 山下恒男著 2009 年
シルバー・デモクラシー-戦後世代の覚悟と責任 寺島実郎著 2017 年
スウェーデンにみる「超高齢社会」の行方-義母の看取りからみえてきた福祉 ビヤネール多美子著 2011 年
ベビーブーマー・リタイアメント-少子高齢化社会の政策対応 野村総合研究所(3つのステージ) 2004 年
ばけとアルツハイマー 生活習慣病だから予防できる 大友英一 2006 年
ボランティア活動の論理-ボランティアリズムとサブシステム 西山志保著 2005 年

政治老年学の発展のために－非政治化（高齢）（神江）

- まだ老人と呼ばないで 染谷侖子著 2010 年
まんがでわかる定年後黄金の7法則 楠木新監修 2018 年
ヤクザと介護－暴力団離脱者たちの研究 廣末登著 2017 年
下流老人－一億総老後崩壊の衝撃 藤田孝典著 2013 年
気がつけばドッキョロージン 澁澤幸子著 2010 年
現代定年模様－15年間の追跡調査 東京都老人総合研究所社会学部門編 1993 年
高齢化時代のボランティア 田中高輝著 1994 年
高齢期における生活の質の探求－イギリス高齢者の実相 A・ウオーカー/山田三知子訳 2009 年
高齢社会のケアサイエンス－老いと介護のセーフティネット 筒井孝子著 2004 年
高齢社会考－われわれはいかに生き抜くべきか 斎藤正彦編 2010 年
高齢者の生死と福祉－ファイナルステージにおけるホスピスケア 浅賀薫著 2005 年
高齢者虐待に挑む－発見、介入、予防の視点 高齢者虐待防止研究会編 2004 年
高齢者虐待－実態と防止策 小林篤子著 2004 年
高齢者福祉の世界 直井道子・中野いく子・和气純子 [編] 2008 年
思い通りの死に方 中村仁一+久坂部羊著 2012 年
死ねない老人 杉浦敏之著 2017 年
社会調査から見た少子高齢社会 金子勇著 2006 年
女は「政治」に向かないの 秋山訓子著 2018 年
少子化社会の家族と福祉－女性と高齢者の視点から 袖井孝子編著 2004 年
少子化問題の社会学 赤川学著 2018 年
少子高齢社会のみえない格差－ジェンダー・世代・階層のゆくえ 白波瀬佐和子著 2005 年
少子社会日本－もうひとつの格差のゆくえ 山田昌弘著 2007 年
人は、老いない 島田裕巳著 2017 年
人口減・少子化社会の未来－雇用と生活の質を高める 小峰隆夫/連合総合生活開発研究所 2007 年
人口減少と社会保障－孤立と縮小を乗り越える 山崎史郎著 2017 年
世代間交流－家庭教育の一環として 栗山昭子著 2008 年
世代間連帯 上野千鶴子/辻元清美著 2009 年
政治老年学序説－胎動するニューシニア 神江伸介 2005 年
絶望老人－新郷由起著 2017 年
続・下流老人－一億総疲弊社会の到来 藤田孝典著 2016 年
退職シニアと社会参加 片桐恵子著 2012 年
大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立 河合克義著 2009 年
達老時代へ－“老いの達人”へのいざない 横山俊夫編 2013 年
団塊ジュニア市場の読み方－76兆円マーケットの実態に迫る (株)エイムクリエイツ編著 1998 年
団塊ひとりぼっち 山口文憲著 2006 年
団塊絶壁 大江舜著 2018 年
男の孤独死 長尾和宏著 2017 年
痴呆病棟 江川晴著 2003 年
超高齢社会の基礎知識 鈴木隆雄著 2012 年
超高齢社会は高齢者が支える－年齢差別を超えて創造的おいへ 藤田綾子著 2007 年
超老人の壁 養老孟司著 2017 年
定年が楽しみになる！ オヤジの地域デビュー 清水孝幸著 2018 年
定年後に夫婦仲良く暮らすコツ 清水義範著 2018 年
定年後の歩き方 江澤隆志等編 2017 年

- 定年後－豊かに生きるための知恵 加藤仁著 2007 年
定年入門－イキイキしなくちゃダメですか 高橋秀美著 2018 年
特養ホームが変わる, 特養ホームを変える[2] 本間郁子著 2005 年
独居老人スタイル 都築響一著 2013 年
脳の老化と病気－正常な老化からアルツハイマー病まで 小川紀雄著 1999 年
変容する人生－ライフコースにおける出会いと別れ 大久保孝治編著 2001 年
卵子老化の真実 河合蘭著 2013 年
離婚してもいいですか?－翔子の場合 野原広子著 2018 年
老いはこうしてつくられる－こころとからだの加齢変化 正高信男著 2000 年
老いへのまなざし－日本近代は何を見失ったか 天野正子著 2006 年
老い衰えゆくことの発見 天田城介著 2012 年
老い方練習帳 早川一光著 2003 年
老害－子ども世代は逃れられない グループわいふ/佐藤ゆかり著 2011 年
老後の真実－不安なく暮らすための新しい常識 文藝春秋編 2013 年
老後生活への軟着陸 助東京老人総合研究所編 1993 年
老後保障を学ぶ人のために 小倉襄二/浅野仁編 1998 年
老人の歴史－バット・セイン編/木下康仁訳 2009 年
老人駆除－Anti-Elders War 竹本善次著 2006 年
老人性うつ－気づかれない心の病 和田秀樹著 2012 年
老人漂流社会 他人事ではない“老後の現実” NHK スペシャル取材班 2013 年
老年心理学 下仲順子編 1997 年

(こうのえ・しんすけ 香川大学名誉教授)